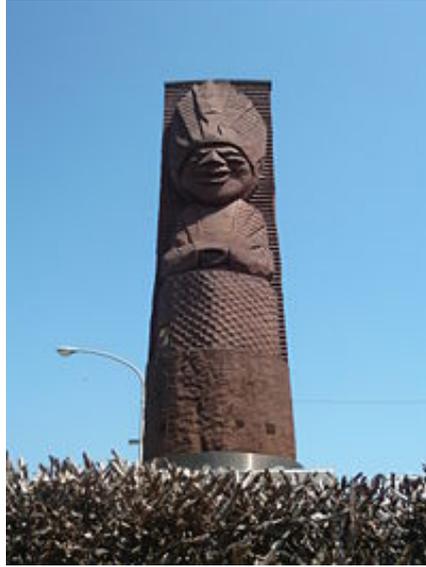


ミノ／キソガワ／オワリ

(断章“ノコギリヤネのある風景” その12)



▲ 新幹線新羽島駅前の円空モニュメント(Wikipedia)

五月のある日、「ノコギリヤネ・トライアングル」の着想を引きずりつつ、新幹線を新羽島駅で降りた。そして、名鉄笠松駅、新一宮駅を經由し、のこぎり二に向かうというルートを選択した。羽島市、笠松町はノコギリヤネの棲息地である。暫しの間、名鉄電車の車窓から「ノコギリヤネのある風景」を眺めた。羽島、笠松、一宮の三つの駅は綺麗な三角形を描いてくれた。

名鉄竹鼻線の車窓から発見できるノコギリヤネはそれ程多くない。しかし、電車の窓に正対するノコギリヤネの北窓を見つけると、電車の進行方向を知ることになる。それは、まちの中で凡その方角を知ることでもある。

のどかな風景が流れていく中、いつしか、人生の「迷い人」を新たな入口へと導いてくれるノコギリヤネの可能性に思いを馳せていた。

木曽川右岸の羽島、笠松の一带は、木曽川が現在の流路となる前まで、尾張に属していた地域でもある。現在は県境となっている木曽川の「境界」を挟んで生まれた「ノコギリヤネのある風景」から見えてくるものは何か。

まずは、新幹線新羽島で出迎えてくれた、この地が生誕地といわれる僧であり仏師でもある円空さんにお導きをお願いすることにしよう。

ノコギリアン (神奈川県藤沢市在住／のこぎり二にノコギリアン・コウバを開設)

1. ミノ・オワリを分けるキソガワ

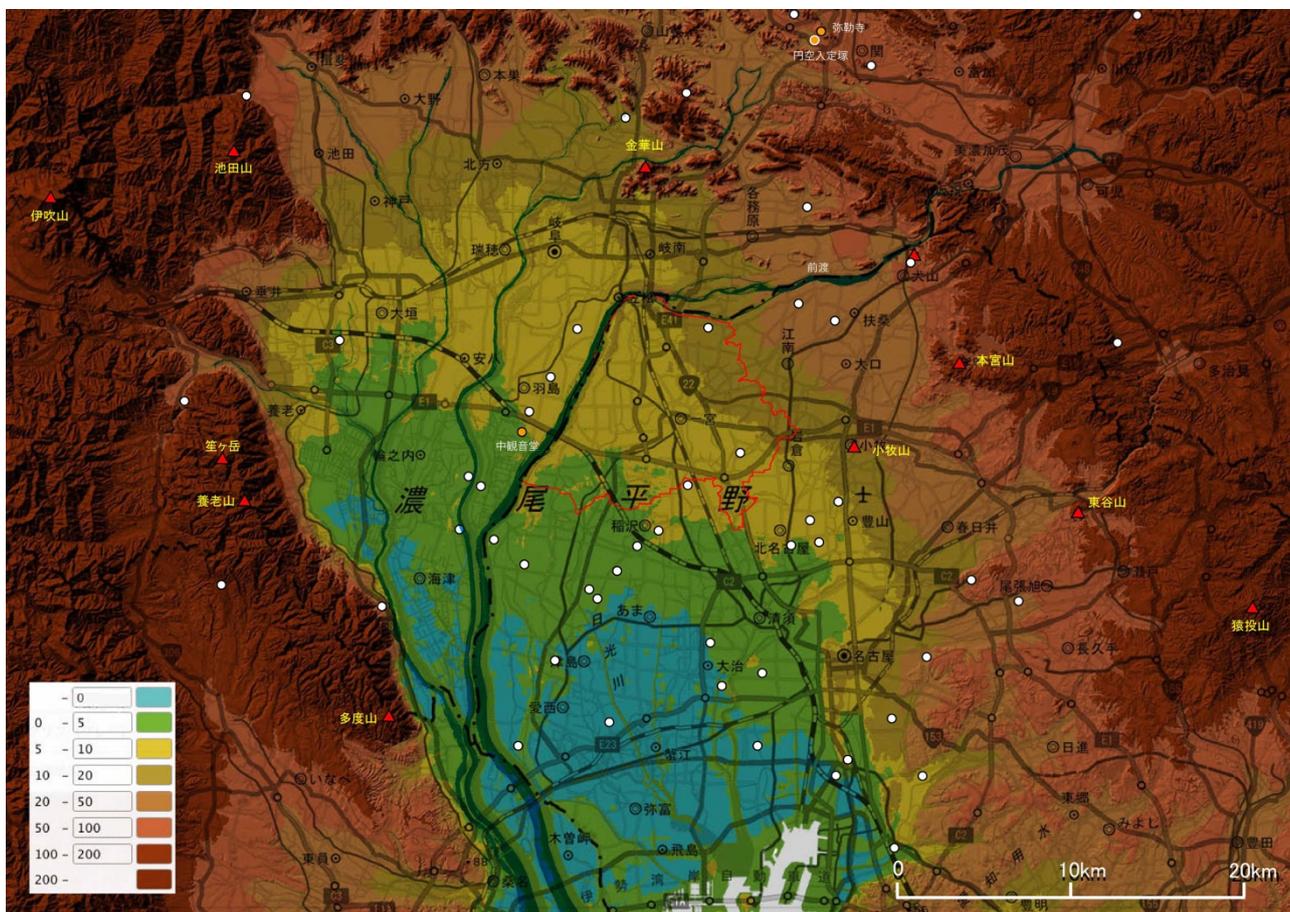
木曾川は尾張と美濃の国を分けてきた。木曾川は、豊臣秀吉の時代、天正13年(1585)の大洪水によって大きく流路を替え、現在の流れになったというのが通説である。かつては、現在の江南市から各務原市に渡った前渡(まえど)あたりから北西方向に流れ、境川となり、長良川に合流する流路であったという。秀吉は、その本流とともに、多くの支流に堤防を築き、大洪水で荒廃した尾張国の復興を進めた。

そして、覇権は移り、徳川家康によって、慶長14年(1609)、木曾川の左岸、犬山から弥富まで約48kmに及ぶ長大な御囲い堤が築造された。同時に、尾張側では本流からの取水が管理され、乱流していた派川の多くは用水路となり水田開拓が進んだ。その一方で、尾張側で木曾川の増水を緩和する機能は低下し、美濃側における洪水被害は増大したといわれる。

生涯に12万體もの神仏像を彫ったという円空は、寛永9年(1632)、美濃国に生まれた(現在の岐阜県羽島市上中町だが、諸説あり)。幼少の頃に、木曾川の洪水で母を亡くしている。羽島市の中観音堂の十一面観音像に刻まれた微笑は、亡き母の面影だろうか。円空仏には微笑と怒りがあるという。木曾川兩岸、尾張と美濃における被害の相違を目の当たりにしたことだろう。

円空仏の残る寺社の分布図を作ってみた。一宮市のエリアは、何故か、円空さんに避けられたようだ。暫くして、あの声が聞こえてきた。マスミダカラスだった。

国の境を決めるのはお前たち人間だ。その木曾川の流れを変えたのは自然の力だ。美濃と尾張の国境であるとともに、「身の終わり」を分ける境でもあったかもしれない。



▲ 円空仏を所持する寺社等 (梅原猛『歓喜するする円空』所収の円空仏MAP 岐阜・愛知篇より作成)

2. 「身の終わり」からの始まり

130年前の明治24年(1891)10月28日の早朝、濃尾平野は未曾有の大地震に見舞われる。マグニチュード8.0を記録した濃尾地震は、わが国史上最大規模の内陸直下型地震で、死者7,273人(美濃4,889人、尾張2,331人)、全壊家屋被害14万戸に及ぶ被害をもたらした。震度6のエリアは、東は静岡、西は大阪にまで及んだ。「身の終わり(美濃・尾張)地震」とも呼ばれた。

マスマダカラス。お前はその地震だけでなく、多くの木曾川の氾濫も見てきているはずだ。

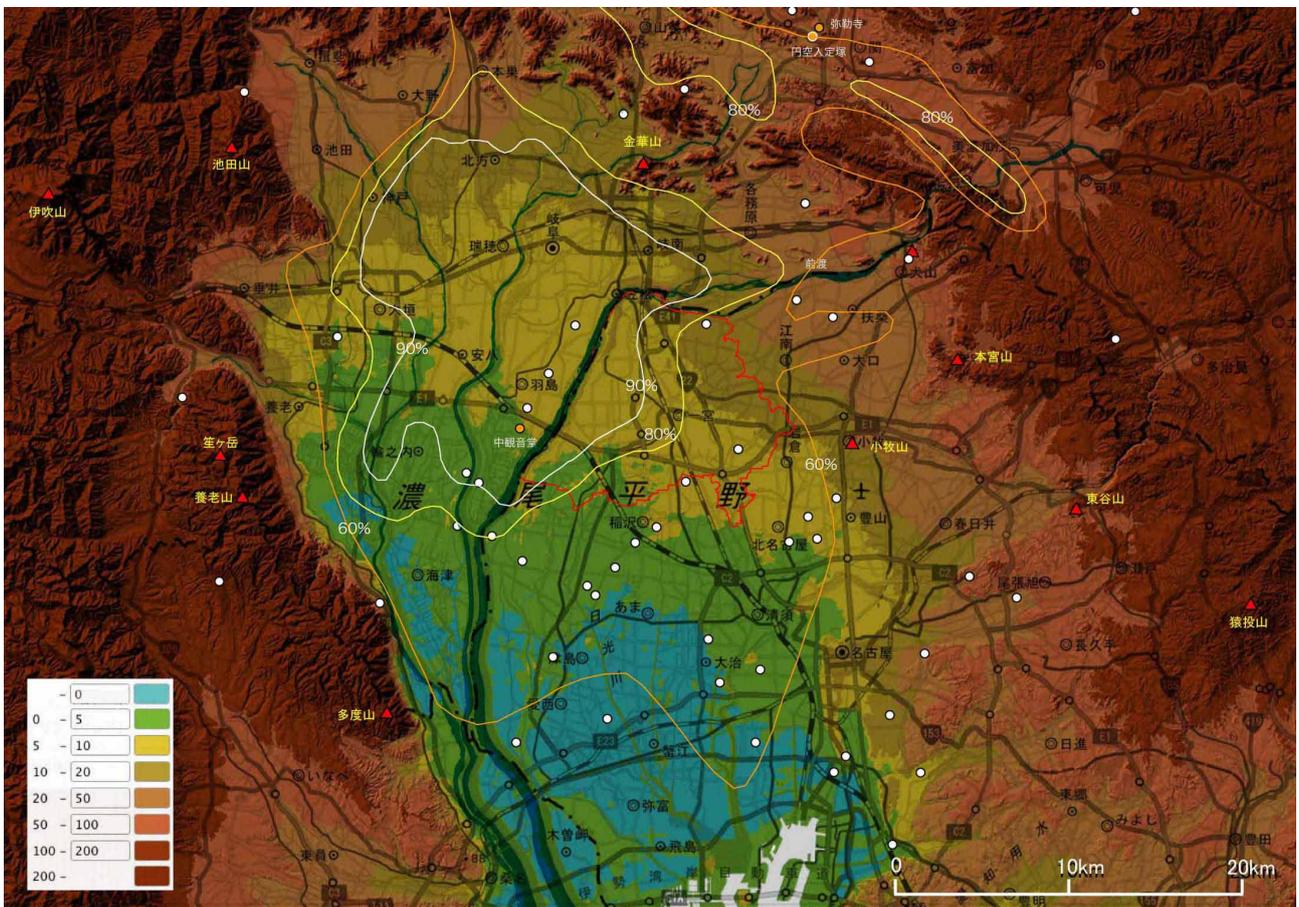
オレたちは、大地の変化の前兆を感じることができる。その地震の時は、何日も前から、大地の叫び声が聞こえてきた。それは大地の怒りなのか、あるいは事後を慮った慟哭だったのか。そして、「ゴー」という地鳴りととともに大地が弾んだ。家屋の下になり、火に焼かれ、多くの「身の終わり」がもたらされた。

木曾川の流れが変わった前の年にも、「身の終わり」の地震は起きている。自然の摂理だ。木曾川の洪水も同じだ。しかし、見方を変えれば、終わりは始まりをもたらす。

濃尾地震では、木曾川を挟んで、木造家屋はほぼ壊滅状態となったらしい。村の風景は大きく変貌した。そして、翌年から綿が不作となり、白一色の綿花畑の広がる風景は消えたという(ノコの風景・その4)。そこから、綿織物から毛織物へと転換していくことになる。

ノコギリヤネの建設が本格化するの、大正5年(1916)頃といわれている。木曾川を挟む両岸エリアに「ノコギリヤネのある風景」が立ち上がってくる。

まさに「身の終わり」からの始まりである。



▲ノコギリヤネのある風景をもたらした濃尾地震(曲線は、全壊した木造家屋の比率。90、80、60%)

3. 木曾川を挟む「ミノ・オワリ生命共同体」

古い木曾川が分岐していたあたり（各務原前渡）から長良川と並行するあたり（稲沢市）までの木曾川の両岸付近には、いまでも多くのノコギリヤネが残り、群生地帯を形成している。

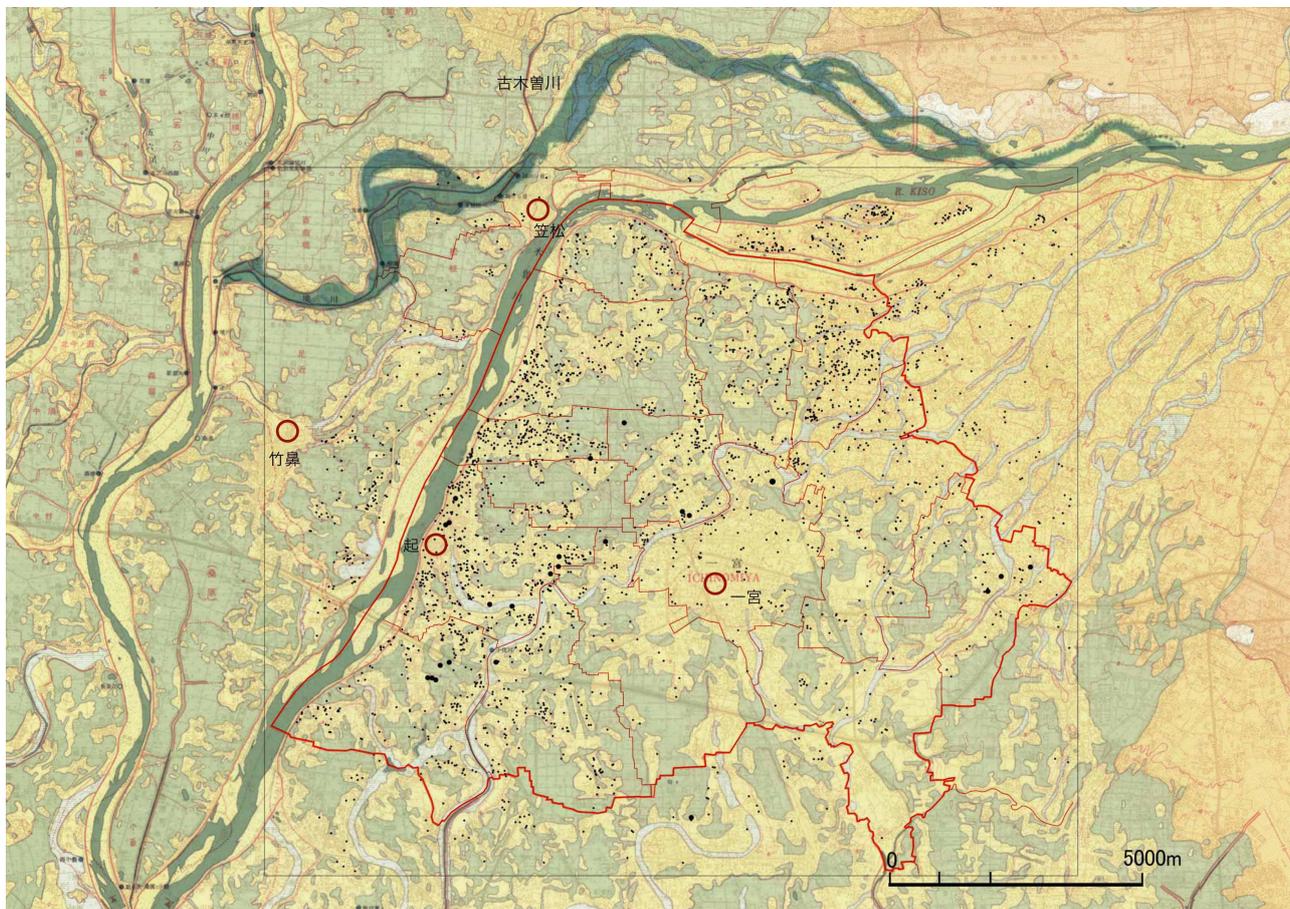
大正時代から戦後の昭和にかけて、ガチャマンと呼ばれた毛織物業の繁栄があった。起を中心にしてきたことから、「起・機業コミュニティ」と名づけた（ノコギリヤネのある風景・その4）。しかし、機業コミュニティは、すでに江戸時代から木曾川を挟む両岸に形成されていた。ここでは、「ミノ・オワリ生命共同体」とでも呼んでおこうか。

江戸時代から、笠松、竹鼻付近では美濃縞が生産されてきた。やがて中心は、美濃から尾張に移行し、綿織物が尾張の特産品となるが、起、一宮以外に笠松、竹鼻にも問屋商人がいたようだ。そして、尾張藩の統制をかいくぐって美濃側に出機を設けた。また、奉公人の多くは西美濃出身の女子（はた織リサ）だった。それは、米生産に劣る地域が連携した生命共同体であった。

ミノ・オワリ生命共同体か。笠松、竹鼻、起トンビの誕生だな。おまえたちが名づけた、悪名高いイチノミヤカラスとの抗争の始まりでもある訳だ。しかし、共同体というのは、これもある意味では、「身の終わり」かもしれないな。共同しなければ生きていけない。そこから逃れられない、運命共同体という訳だ。輪中も同じだ。

その共同体の象徴でもあるノコギリヤネは、まだ数多く残されているようだが、機業を営むものも少なくなり、共同体ではなくなってしまったのではないか？

それに、またいつか、「身の終わり」をもたらす大地の震動、木曾川の氾濫が来るかもしれない。ノコギリヤネの多くは、一掃されてしまいそうだな。



▲ 木曾川河畔のノコギリヤ群生地（ノコギリヤネ 100年マップ拡大版）

4. 木曾川から始まる風景のメタモルフォーゼ

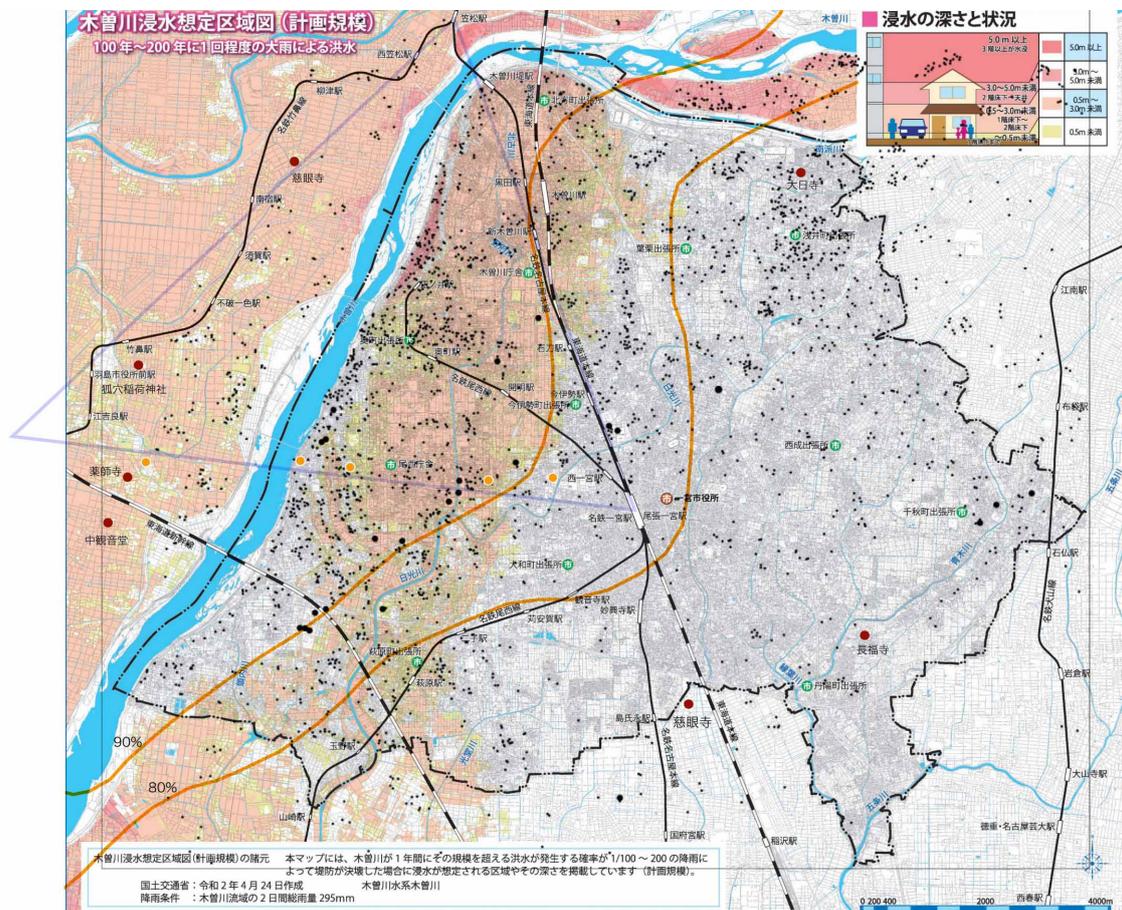
縁起でもないことを言うカラスだ。確かに、地震、洪水が起きた時のリスクは大きい。災害はわれわれの想像を超えてやってくる。ただ、ノコギリヤネは時間とともに消えていく運命にある。かつての共同体のつながりは薄れ、その意味では「終わり」は徐々に始まっているのかもしれない。それが自然の摂理によって早まるかもしれない。

「ノコギリヤネのある風景」もやがて消えてなる…

いや、それは違うぞ。ノコギリヤネ・トライアングルのように、のこぎりニを中心にして、幾つかのノコギリヤネが関係性を築いている。工場は消えても、その織機が三つのノコギリヤネをつないだ。「ノコギリヤネのある風景」は、カタチを変えて残っている。森羅万象、「うつろう」ものだ。やがて、ウツ（空）になる。そして、生まれるものがある。もう始まっているかもしれない。それは、尾張を超えて美濃を含めた「変節（メタモルフォーゼ）」だと思う。

お上は木曾川を境界としてきたが、兩岸で暮らす領民、住民はそうではなかった。大河に苛まれながら生きるために連携してきた。人間は、自分の側一方からしか見ていないが、オレたちは上から見ているからわかる。木曾川がこの大地をつくり、ムラが生まれ、マチ、クニができた。一方で、木曾川は無数の「身の終わり」をのみ込んできた。円空の十二万体の仏像に生命を吹き込んだのは、その木曾川かもしれない。

しかし、はたして、新たな「ミノ・オワリ生命共同体」は生まれるだろうか。



▲ 木曾川水系ハザードマップとノコギリヤネ他

○エピローグ：のこぎり二に開けられた“円空”

「身の終わり」にまつわる逸話は、源頼朝にさかのぼる。頼朝の実父義朝をだまし討ちにした尾張の武将・長田忠致(おさだ ただむね)は、頼朝から寛大にも「懸命に働いたら美濃尾張をやる」と言われ、その言葉通り懸命に働いたという。しかし、平家追討後、「約束通り、身の終わりをくれてやる」と言われて美濃で斬首されたと伝わる。(諸説あり)

円空の「身の終わり」は、およそ330年さかのぼる元禄8年(1695)の7月15日、現在の関市池尻の長良川河畔で入定とある。齢64。木曾川にあらず。

そして、77年前の8月15日。この国の多くの「身の終わり」を招いた太平洋戦争が終決した。

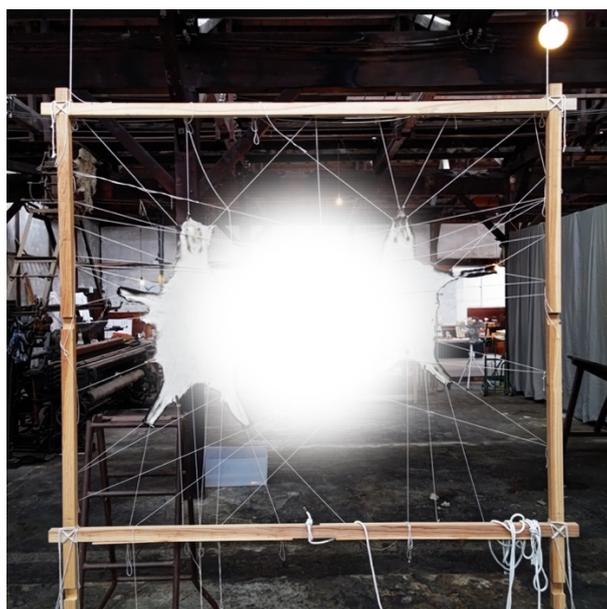
「身の終わり」というフレーズは両義性を持つ。残された「こころ」の行方が気にかかる。ちよんとお盆を迎えて、魂、霊が帰ってくる。円空さんは、身を失った「こころ」のために仏像を彫っていたのだろうか。

「身の終わり」の向こう側にあるもの。本体のなくなったノコギリヤネの「こころ」。いろいろ気になることはあるけれど、まずは、木曾川の向こう側にあるものから探ってみようか。

さて、冒頭に戻る。羽島から名鉄線で笠松駅を經由し、新一宮駅に到着した。そこからバスでのこぎり二に向かった。そして、このラインを延長すると羽島駅。実は、このライン付近には、気になる施設が存在している。一宮市ファッションデザインセンター、のこぎり二、三岸節子美術館、尾西歴史民俗資料館、そして木曾川を渡った先には、羽島市のテキスタイルマテリアルセンターなど。新たな「ミノ・オワリ生命共同体」の誕生に関わってくるだろうか。

「あいち2022」が始まった。このイベントは、ずっと休眠状態の一宮に新風を呼び込む「穴(円空)」となるだろうか。のこぎり二も会場の一つであるが、ここは、すでにいろいろなところにつながっている。

2022.8.15 (立秋・寒蝉鳴／りっしゅう・ひぐらしなく)



▲ のこぎり二の“円空”は、どこに通じる？